

ば、當時已に堂々たる大社にして、その宮司は、神人競争の標的であつた。又仁明天皇承和元年十一月廿七日、能登國に座す正三位勳一等氣多大神宮の禰宜祝二人に、始めて笏を執らしめるとあり、續日本紀は之を九月の條に係けてゐるが、その孰れの正しきにもせよ、越前氣比神社の祝等は、この翌年に至りて、鹿島・能登兩大神に准じて把笏せしむとあるによりて、本社の際る優秀なる地位に在つたことを察せられる。文德天皇嘉祥三年六月二日氣多神社に從二位を授けられ、仁壽三年八月十五日封戸十畑・位田二町を加へられた條には、既に正二位勳一等とあり、清和天皇貞觀元年正月廿七日從一位となり、社傳には醍醐天皇寛平九年十二月三日正一位に陞叙せられたといつてゐる。後明治四年五月國幣中社に列せられ、大正四年十一月十日國幣大社に進められた。

(一)社號の初見—氣多神社の名の初見は萬葉集に於いてあるが、種々に誤り記されてゐる。即ち萬葉十七に赴き參氣比大神宮行海邊之時作歌があるが、氣比が氣多の誤りであることは勿論である。又元曆校本には氣太神宮となつてゐるが、これはケタジングウと訓むのではなくて、多の字を落したのである。(二)主神—氣多神社の主神は、社傳に大己貴命であるとせられ、又一書には天活玉命とも天活目命ともせられ、氣多大神・能登大神又は一宮大神とも呼ばれたが、神佛習合の結果正長元年六月及び寶徳二年八月には、正一位太政大臣勳一等氣多不思議大智滿菩薩と記され、謠曲禰祭にも亦氣多不思議智滿大菩薩とせられてゐる。

(四)諸書の記載—承久三年注進の能登國田數目録に、『氣多神社敷地十一町一段八。建保五年卯月日自鎌倉將軍家一宮御寄進』と見え、式内等舊社記には『氣多神社。式内一座。名神大社。邑知郷一宮村鎮座。祭神大己貴命。當國一宮也。稱一宮大明神』とある。又能登名跡志には、『本社は大己貴命、奥社は素戔嗚尊、稻田姫の命也。則御夫婦の神此所にて神かくれ給ふといへり。頂の社は穴持の命の御御石也。神代よりの御鎮座にして、北國の大社也。又諸神記の中の卷に曰く、氣多の神社は崇神天皇の御宇御勸請と有。又類聚國史神祇の部に、文德天皇齊衡二年五月辛亥詔ありて、能登國氣多の大神宮寺に住寺を置くと也。其頃は社人禰宜社僧多くありて、今に六萬方などいふ所あり。社領其頃は羽喰郡三萬石也。中頃畠山國守の時は三千石なり。其後は大神宮寺多くの社人衆徒も退轉して、御當代に成、御元祖大納言様社領三百五十石御寄附。又平常様に成、大宮司櫻井の外に社僧四ヶ寺御建立有り。社頭諸堂御再建有て、御膳調進の濱十町、網船一艘御寄附。大宮司大監物は六十五石、社人廿人と神子一人は七石充、別當長福院は六十石、地藏院・藥師院・正覺院三ヶ寺共に十石充也。御社領三百五十石の内何も配分す。櫻井大宮司は、一國の神主の觸頭の録所也。長福院は四ヶ寺の首領也。此寺の露地は利常公御逗留あつて作らせられしとして見事也。又當社の寶物數多有る中にも、瀟沙珠あり。是は種々奇瑞有し靈珠也。頼朝公奉納の太刀一振、梶原の太刀一振あり。其外寶物多し』と記してゐる。

(五)社僧と社主—社僧は明應・大永・享祿の文書に、長福坊・玉藏坊・正覺坊・東林坊・給灯庵・多門坊・佛藏坊・延命院・地持庵・寶喰坊・不動院・文珠坊・藥師院・勝定坊・定住坊などの名を見るが、戰國以降幾かに長福院・藥師院・正覺院・地藏院を遺したに過ぎず、是等は皆眞言宗であつた。之に反して社主の多かつたことは、天文中の一宮神職交名によつて知られ、大宮司散位櫻井宿禰基起・權大宮司散位櫻井基盛・大祝散位櫻井成正・大總行散位櫻井吉基・正禰宜散位櫻井吉基・正禰宜散位櫻井基光・權總行散位櫻井基秀・權々惣行散位櫻井基直・左大別當散位櫻井成次・一權櫻井基家・祝詞司櫻井基傳・大穴持宮司櫻井直宗・權宮司櫻井友永・白山宮司櫻井基定・若宮々司櫻井基次・楊田宮司櫻井友直・權宮司櫻井友依・權宮司櫻井友吉・左主神櫻井基繼・右主神櫻井基吉・三權櫻井元盛・權禰宜櫻井元依・二權山重家・權宮司橘真家・權宮司橘依景・權宮司橘正依・右大別當山吉繼・權宮司山末延・權宮司山末景・權宮司山貞時・權宮司藤井行綱・權宮司藤井包弘・權宮司橘二計・權宮司橘宗景・橘大行事・橘小行事・火司山包次の名を擧げてゐる。

(六)社殿—本社舊參道には延寶年間の築造に係る隨神門がある。神門廻廊も亦延寶年間、拜殿は承應年間、本殿は天明年間前田氏の寄進する所であるといふ。

(七)國寶—氣多神社には後奈良天皇から下された女房奉書があつて、明治三十三年四月國寶に指定せられた。これは天文の頃一宮に禁裏御料所があつたが、その上納錢を神祇伯雅業王を通じて獻納した際、上せうみんの之に關し周旋したことを嘉せられたもので、その

上せうみんは後奈良天皇の皇弟上乘院下河原殿道喜であらうかと思はれる。この奉書は寛永の頃加賀の加藤久康の所有に歸し、久康から神社に奉納した來歴のものである。境内攝社若宮神社も亦明治三十九年四月國寶建造物に指定せられてゐる。本屋の梁に永祿十二己巳年畠山義綱再建と記されてあつた。構造一間社流造、建坪六坪三合八勺を有し、桁行一間二尺八寸五分、高二間、梁間四尺五寸、欄干高一尺一寸五分、總廻八間三尺八寸、屋根十五坪二勺檜皮葺で、葺股・手挾その他諸種の繪影彫刻頗る雄麗、殊に葺股足元の彫刻は妻飾りの大瓶束・肘木等と共に意匠自由で、能く當時代の特徴を發揮してゐる。この建築は昭和四年大修理を加へられた。

(八)祭儀—この神社の祭儀には、謠曲に作られてゐる禰祭を初めとして、平國祭・追澄祭・斧祭・御饗祭・鳥居詣等特異のものが多い。各その條に載せる。

(九)境内の古墳—氣多神社背後の丘陵は、千古斧鉞を入れざる社叢を以て蔽はれ、殆ど原始状態に近い林相を示して、植物學者の注意を引いてゐる。樹種はツバキが多く、シヒとタブがそれに次ぎ、雑多の攀緣植物が樹幹にからみついてゐる。其の間に三個の古墳があつて、その中社殿に最も近い積石式の塚は、巨石を以て蔽はれてゐるが、罅隙から小形の石室の内部が窺はれ、既に屢發掘せられたものである。

ケタノオクシヤ 氣多の奥社 氣多神社の境内は凡そ二〇〇米四方であるが、本社から北方一〇〇米を隔てた神林中に岩石を以て圍んだ一區があり、その中に兩祠がある。もと